

—(書評)—

平可夫 (ピンコフ) 著

2000年の中国軍

—日本はNOと言える時代を迎えられるのか—

(立教大学産業関係研究所) 田辺義明

いま解放軍が、世界の注目を集めている。

日本のスポーツ用品店で売られている一番安いリュック・サックは、解放軍の背囊そのものである。また画材店のキャンパス・バッグは、解放軍の雑囊である。これは、べつに解放軍ブームが起きているためでもない。中国が軍事物資を放出しているのである。

かつて毛沢東は「人民の海に沈める」などと豪語したが、さすがに現代のハイテク戦争の時代の到来を、中央も実感したとみえて、軍の近代化には躍起になっている。解放軍は大きな転換点に立っている。冷戦時代も終了し、新たな戦略と戦術の策定に懸命なのであろう。あらゆる国から技術やノウハウの導入に努める傍ら、自国でも積極的にR&Dに取り組んでいる。

1, 2000年が読める本

その解放軍が、2000年時点でいかなる変貌を遂げているのか。それについて書かれた原稿が、一つにまとまった。しかも貴重な最新データも添えられて、これでは将来の中国がいかなる国際的地位を占めるかについて、関心がある者には欠かせない文献であろう。

本書では、まず「核」の問題から入り、部隊配備中の、そして開発中の各種兵器に関する情報が、わかりやすく詰め込まれている。写真も添えられているので、より理解しやすいであろう。またハード面ばかりでなく、著者はソフト面に関し、軍事予算の算定比較の方法などについても、詳細な検討を加えている。

2, 中国の空母はどうなる

中国が航空母艦を建造しているという報道には、度々接している。とくに空母は、母艦(船)と搭載機(飛行機)という二つのシステムを合致させるという、高度な(運用)技術を集大成しなければならない。解放軍では90年代に入って、艦上機要員の養成を始めているそうである。空母用の岸壁も完成しているとのことで、あとは巷で噂される4万5千トン級空母の出現を待つだけとなった。ということは、本書にも詳しく書かれている。しかし日本の軍事筋では、中国の空母保有、少なくともCTOL機(通常機)用の空母の保有は無理ではないかと、ささやかれている。中国も当初は、イギリスほかを選んだようにV/STOL機(垂直・短距離離着艦機)用の空母を構想したようだ。しかし、搭載機種(AV8ハリアー)の価格の面から手が出なかったといわれている。CTOL機にするにしても、開発はこれからである。しかも、音速で飛行できる機体を、200数十メートルの甲板で、24時間全天候で運用するノウハウは、誰も教えてくれないのである。またスペインから空母の設計図を入手したという記述がみられるが、それはスペイン海軍が88年に就役させた「プリンシペ・デ・アストゥリアス」のものであろう。同艦は1万7千トンの小型空母とされるが、実際には70年代にアメリカが構想した「SCS(シー・コントロール・シップ:制海艦)」に準拠しており、米海軍が72年から74年まで実施した強襲揚陸艦「グアム(LPH9)」での試用実績をフィードバックさせたものである。これは中国海軍が意図するところの空母とは関わりがないと思われる。

本書は、綿密な分析から成り立っているもので、類書に例をみない実証的な研究の成果である。軍事評論家による、軍事問題に関心のある読者に書かれた、いわばプロ向けの記述であるからにして、素人には不可解な、略語・型番の羅列に辟易する方もあるかも知れない。しかし、これを読まずし

て現代解放軍の実態は、理解し得ないのであるから、若干の辛抱をされたい。

3. 次作への期待

これからは、本書続編への、やや辛口の期待となる。

まず、ロジスティクス（兵站）の問題。先の大戦では、日本軍敗北の、最大の要因はこれであった。解放軍のロジスティクス（あちらでは「後勤」という）の研究も必要であろう。ハイテク戦争に「三就の原則」は通用しない。

それから引き合いに出される西側とくにアメリカ、そして台湾の軍備について適切さを欠く表現が散見されることが気に掛かる。海軍に限っているならば、冒頭の序章（16頁）「ノックス対潜駆逐艦」は、「ノックス級フリゲイト」、もしくは米軍やNATOでは「FFG」に分類されている「O・H・ペリー級防空フリゲイト」が正しいのではないか。のちに「フリゲイト艦」との表記が出て来るが、これは「ボート艇」というのと等しく「フリゲイト」だけでよい。そして、がっかりさせられたのは、第8章（241頁）「（米空母）キティホークから飛び立ったP3C対潜水艦機」とはどうしたことであろうか、陸上大型機のP3Cオライオンは空母からは運用出来ない。「S3バイキング」が正しい。もっとも米海軍は、キティホーク（CV63）の僚艦ジョン・F・ケネディー（CV67）がやった、C130ハーキュリーズ大型輸送機にJATOとアンチスキッドを付加して離着艦を試みるという二の舞をしでかしたのかも知れない。

枝葉末節にとらわれてはいけない、これ以外にも正規部隊と基幹民兵用の、おそらくは500万挺に上る自動小銃の改変が進行中であることも忘れてはならないし、中国で開発中の新軽戦闘機が、台湾の「経国」戦闘機と酷似していること、それから筆者がJ8戦闘機の派生型に、過大な評価を

与えていることなどが気に掛かる。しょせんJ8系は翼型からしてもMiG21フィッシュベットの流れを汲んでおり、翼面加重から考えても西側の、ブレンデッド・ウイング・アンド・ボディー機には対抗する術がないであろう。1世代遅れた設計思想なのである。これらも老婆心ながら付け加えて置く。

4. 本書の意義

米ロ両大国の狭間で、いつの間にか中国が第3の軍事大国として発展していることを、世に問う警鐘の書である。これを一読せずしてアジアの明日は語れないともいえよう。諸兄に御購読を薦めたい。筆者は、若い有能なカナダ在住の中国人である。このような軍事評論家が大成してくれることを望んで、書評に代えたい。

（ちなみに内緒話を一つ。60年代自衛隊は、米国から対潜哨戒機S2Fトラッカーを導入する際に、太平洋艦隊の空母上での運用訓練も行っていった。当時はベトナム戦争中で、日本近海に海上自衛隊の対潜空母を遊弋させるつもりであったらしい）。

（ISBN-915441-86-5, 1995年12月蒼蒼社刊, 2200円）